

平成30年度文部科学省行政事業レビュー「公開プロセス(EBPM)」の結果について

1. 外部有識者の評価結果

6月26日(火)実施

()は平成30年度予算額

事業名	評価結果		とりまとめコメント
研究大学強化 促進事業 【EBPMLレビュー】 (5,056 百万円)	廃止	0	●事業開始の段階から検証段階を想定した事業設計を試みる必要がある。 ●URAの自主財源化はアウトカム指標ではなく、アウトプット指標にすべきであり、URAの効果を検証する適切な指標、仕組の構築を検討すべき。 ●URAの活動実績を評価する際には、定性情報についても補完する形で検討する必要がある。 ●今回のEBPMのスキームやノウハウについて、横展開できる工夫を検討されたい。 ●今回のプロセスを通じて得た成果と課題を踏まえて、事業の再構築を進められたい。
	事業全体の抜本的な改善	0	
	事業内容の一部改善	5	
	現状通り	1	

2. 評価のコメント

- アウトカム指標・インパクトの整理は適切に改善されている。
- 研究力向上のために URA が有効であるとしてもその財源とは無関係であり、URA 人件費の自主財源化については事業が順調に進行しているかの指標としてアウトプットに位置付けるべきである。
- URA の自主財源化と URA の効果とはリンクしない。URA の自主財源化はアウトカム指標としては不適切。
- URA の効果を検証する適切な指標、仕組の構築について検討する必要がある。
- 統計的な厳密性を追う「研究」ではないため、ある程度割り切って指標を設定するのが良いように思う。URA の活動実績を定性情報で補完してはどうか。ロジックモデルは、インパクトが新規インプットにつながって、サイクル化するのではないか(マタイ効果)。
- ロジックモデルはかなり整っていると考える。成果が出ているかも大切だがロジックモデルを構築して、何をもって成果が出ているのか分析をすることが重要。
- 少なくとも一定の成果が見えているので、大学研究強化の他の事業との整理もできくるのではないか。
- 施策の効果検証が可能になるよう類似の対象において実施する施策にバラエティを持たせるなど、対象選定の段階から検証段階を想定した事業設計を試みるなど、将来に向けた改善が期待される。
- 本事業の成果と課題が見えつつあり、事前勉強会からこれまでの EBPM を中心としたやりとりは有意義であった。
- 文科省の事業は、「事業はじめにありき」で仮説があいまいだった。
- 本件のプロセスを通じて得た「成果と課題」をふまえて、事業の再構築を進められたい。
- 具体的にやるべき最初のアクションは、採るべき数字を定め、これを採集することであろう。
- 母集団(n)が少なすぎて、t 検定の結果が有意であろうか否か明確には言えない(「傾向が見られる」程度と思う。)ことや、他の影響因子の作用を排除できないことについて検討すべき。試行としての意味はあった。
- 事業自体は感覚的に有益と思われるが、対象群との有意差から厳密な評価をするのは難しいと思われる。他の要因も勘案した上で、大ぐくりで評価するしかないだろう。
- 本件 EBPM のノウハウを、文科省さらには各大学で横展開できる工夫をされたい。